

經濟論叢

第九十八卷 第一號

カール・コルシュの實踐の弁証法……………平 井 俊 彦 1

金輸出禁止繼續の論理（1917—1919）(1)……………小 野 一 一 郎 15

ドイツ革命と社会化論争……………阪 上 孝 30

ポーランド社会主義運動とその思想……………竹 本 信 弘 47

昭和四十一年七月

京都大學經濟學會

ポーランド社会主義運動とその思想

——若きローザの思想と行動 (1) ——

竹 本 信 弘

I 問題の提起と研究方法

すべて、歴史の核心にふれる思想家というものは、自分の人格の全体を歴史に投げかけ、こうして生ずる歴史との葛藤のなかで、歴史の息吹きを自己の思想のうちにうけとめるものである。しかも、かれの思想は、このようにして歴史的個性を宿すことによって、同時に、普遍的なものに結びつくのである。

たしかに、われわれをとりまく社会的現実、先人のそれと同じではないわれわれには現代に固有な歴史的状況が迫っているはずであり、したがって異なった歴史的課題が与えられているはずである。しかし、われわれと先人の思想家とのあいだには、こうした歴史性の相異をこえた共通の問題がよこたわっていることも事実であろう。われわれは、先人の歩んだ道を追思惟することによって、このような共通の問題を解いてゆくうえでのなんらかの手がかりをつかむことができるのではなかろうか。わたしは、ここに、思想のもつ普遍性を求めたいのである。つまり、思想家はかれの全人格を傾けて歴史に対決しているのだから、われわれが、かれの思想を追思惟し、かれのとらえた問題をわれわれ自身の問題としてゆくばあい、なによりもまず問題としなければならないのは、この思想家の人格全体に光をあて、その思想を、歴史のなかで生きた人格の全体としてとらえること、これである。

わたしがこの小論で扱うローザ・ルクセンブルクの思想は、これまでの研究において、このように《歴史のなかで生きた人格の全体》としてとらえられてきたであろうか。ここで、わたしは、ローザの思想をめぐる研究史に詳しく立ちいるわけにはゆかない¹⁾。ただ、わたしが指摘しておきたいことは、これま

での研究は——レーニン主義の名においてかの女の理論を葬りながら、それと切り離されたところで、かの女の革命的情熱あるいは実践を救うか³⁾、それとも逆に、かの女を思想をボルシェヴィズムの批判思想として評価するか⁴⁾——この2つのタイプとして、ほぼ整理されるであろうということである⁵⁾。しかも、この2つのタイプは、内容的にはたがいに正反対のことを主張しているにもかかわらず、方法的にはまったく同じ地平にあることも、同様に指摘できるであろう。すなわち、いずれのばあいにも、かの女を思想は、それ自体としてとりあげられるよりもまえに、超越的に、いわば外から、政治的立場を基準にして断罪されたり評価されたりしてきたにすぎない。しかし思想というものは、単に外から政治的に切ってしまうものではなかろう。そうではなくて、《歴史のなかで生きた人格の全体》として思想を考える立場から、かの女を思想そのもののなかに身をおき、それと対決し、こうしてかの女を思想の全体像をとらえなおすこと、こういう試みが行われるべきだと、わたしは考えるのである。

そしてわたしは、かの女を思想の全体像を問題とするばあい、その思想的立点をば、ポーランドにおける若きローザ⁶⁾の思想と行動のうちに求めたい。

1) 研究史については、西川正雄、ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ、「歴史学研究」第239号、昭和35年；および同氏、ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治、「史学雑誌」第69編第2号、昭和35年に学ぶところがおおきい。

2) たとえば、F. Oelßner, *Rosa Luxemburg. Eine kritische, biographische Skizze*, 2. Aufl., Berlin, 1952, 邦訳、杉山忠平訳、理論社；„Gegen alte und neue Versuche, Rosa Luxemburg für den Revisionismus auszunutzen“, *Einheit*, Nr. 7, 1957, SS. 785-801；H. Seidel, „Einschätzung der theoretisch-philosophischen Verdienste der deutschen Linken, insbesondere Rosa Luxemburgs“, *Wissenschaftliche Zeitschrift der Karl-Marx-Universität Leipzig*, 11 (4), 1962, SS. 733-736；吉村励、ローザ・ルクセンブルク、「社会主義講座」3、革命と行動の社会主義、河出書房、昭和31年。なおザイデルの論文は、ローザ・ルクセンブルクの思想に理論と実践の統一をみようとする試みであり、この点ではエルスターの論調に反対するものではあるが、ローザの思想を、レーニン主義との距離によって裁断している以上、このタイプに含めることができよう。

3) たとえば S. Hook, *Marx and the Marxists, the Ambiguous Legacy*, Princeton, 1955.

4) つぎのフリーリッヒの労作は、この2つのタイプに整理しおせない労作である。P. Fröhlich, *Rosa Luxemburg. Gedanke und Tat*, 2. Aufl., Hamburg, 1949.

5) わたしはここで《ポーランドにおける若きローザ》と書いているが、このことの意味は、わたしがこの小論で扱う1895—98年段階に、ローザ・ルクセンブルクが空間的にポーランドにいた、ということではない。周知のごとく、かの女は、すでに1889年に逮捕を避けてチューリッヒにのがれていたし、1897年にはドイツに移住していたのである。しかし、98年ドイツにおける修正主義論争のなかで急進派の理論家として論陣をはるに至るまでのローザ・ルクセンブルクの思想と

ドイツ革命のヒロインとして知られるローザ・ルクセンブルクは、ドイツにおける闘いのなかで、カウツキーのマルクス主義ともベルンシュタインのマルクス主義ともちがったかの女自身のマルクス主義をゆたかに展開し成熟させてゆくのであるが、しかし、かの女のマルクス主義の思想的個性、ないしは、その真髓となるところのものは、すでにポーランドにおける若きローザのうちに宿っていたと考えられる。すなわち、この段階にあって、かの女は、かの女自身のマルクス主義の思想的構えを、ほぼうち固めたといえよう。したがって、われわれは、ポーランドにおける若きローザにとり組むことによって、かの女のマルクス主義像をとらえ、こうして逆にマルクス主義思想そのものの核心の若干をもさぐりあてることができるであろう。

最後にわたしは、このような問題視角からこの小論を論じてゆくばあいの方法について言及しておかなければならない。いうまでもなく、革命家ローザ・ルクセンブルクにとって、理論は、それ自体として意味をもつものではなかった。理論は、実践上の諸問題を解き、行動の世界に秩序と方向を与えてくれるからこそ、それは、かの女にとって抜き差しならぬ火急の課題となるのであった。そして、行動を思想の理論内容にまで高めてゆくばあい、この思想のうごきを内から支え衝き動かしているものは、かの女の方法意識であった。わたしは、思想のなかでこのような意味をもつ方法意識をとりだし、そしてこの方法意識との関係のなかで、かの女の思想の理論的な内容を、あきらかにしてゆきたいのである。というのも、理論の内容的展開は、この方法意識に関係づけられ、補われることによって、はじめて、外から叙述されたものという外面性をぬぐい去り内在的・論理必然的なものとなるのだからである。

行動を動機としながら、それを方法意識が担う、そしてこの方法意識が思想の理論的内容を結実させてゆく、——このような立体的なからまりあいによって、わたしは、ローザ・ルクセンブルクの思想の全体像を、《構え》として、

行動は、すべてポーランドの闘いをめぐって展開されている。このような意味からして、わたしがこの小論であつかう段階のローザは、なによりもまず《ポーランドにおける若きローザ》であったといえよう。

あきらかにすることができるであろう。これが、この小論の方法である。

以上の方法的手続きにしたがって、わたしは、この小論をつぎの順序で論じてゆくであろう。すなわち、――

- Ⅰ ポーランド社会主義運動とローザ
- Ⅱ PPS およびマルクス・エンゲルスのポーランド論
- Ⅲ 方法意識の確立
- Ⅳ ポーランド革命論
- Ⅴ 結 語

Ⅱ ポーランド社会主義運動とローザ

ポーランドにおける若きローザの行動にとって、何が、どのように、問題であったのか――これをあきらかにすることが、第Ⅱ節および第Ⅲ節のわたしの課題である。まずこの第Ⅱ節で、わたしは、ポーランド社会主義運動の歴史的背景のなかに問題がどのように生じたか、を探り、かの女の行動にとって「何が」問題であったのかをあきらかにするであろう⁶⁾。

ポーランド社会主義の歴史は1830年代に始まるが⁷⁾、科学的社会主義の組織運動が展開されるようになったのは、70年代以降のポーランド、それもロシア領ポーランドにおいてであった⁸⁾。最初に現われたのは、ワリンスキー Ludwig

- 6) ここで、わたしは、社会主義運動史および論争史の観点から、問題の成立した事情を考えようとしているのであって、ポーランドの経済発展および階級関係のうごきそのもののなかから、これを考察しようというのではない。この点は、ローザ・ルクセンブルクに依りながら、第Ⅰ節で展開することになる。
- 7) この段階の社会主義は、すぐれて思想運動としての社会主義であった。すなわち――フランスのユートピア社会主義とくにフーリエの影響を受けたレウェル Joachim Lelewel が、1832年、『民主主義協会』Democratic Society を創設したし、また1835年には、『民主主義協会』よりもよりラディカルな『ポーランド人民』Polish People が、1830年蜂起の前衛たちによってつくられ、ポーランド最初の社会主義思想家ヴォルシェル Stanislaw Worcell によって指導された。しかし、これらの集団は、非常に民族主義的・愛国主義的であった、否、神秘的・宗教的でした。また、母国に都市プロレタリアがほとんど存在していなかったことのために、農業的性格がつよく、まだまだ社会主義組織といえるほどのものではなかった。この点については、つぎの文献を参照されたい。M. K. Dziewanowski, *The Communist Party of Poland: An Outline of History*, Harvard Univ. Press, 1959, pp. 3-4; G. D. H. Cole, "Chap. XI Poland-Rosa Luxemburg", *The Second International*, Part I, London, 1956, p. 488.
- 8) ロシア領ポーランドで社会主義運動がとくにはげしく聞かれたのは、1つには、ロシア・ツァリ

Warynski の指導する組織で、『抵抗基金団』Resistance Fund⁹⁾と呼ばれた。この集団は官憲の断圧によってわずか2年でその生命を断たれたが、1882年、同じワリンスキーは、より本格的な組織『プロレタリアート』Proletariat¹⁰⁾の運動によって、この断圧にこたえたのである。「かれは、ロシアのテロリスト組織『ナロードナヤ・ヴォリャ』Народная Воля に接触し、その理想にシンパシーを抱いてはいたけれども、しかし、暗殺には賛成せず、経済と国家行政の攪乱を目的としたストライキの煽動を説いた。かれの活動はみじかかったが、かれの考え方は、1890年代になっても、十分ポーランド社会主義運動のなかで強い支持をえていた」¹¹⁾といわれている。またかれは、折にふれて、高まる世界主義的感情を吐露して語ったものである、「ポーランドよりもっと不幸な国がある、それは、プロレタリアートの国である」¹²⁾と。こうして、ワリンスキーの『プロレタリアート』は、ポーランド社会主義運動における国際主義潮流の基礎をうち固めたのである¹³⁾。しかし、「多くの労働者そして広汎な

ズムの強烈なロシア化政策とポーランド・ジェントリーにたいする報復的強奪によるものであったし、また1つには、ロシア領ポーランドにおける工業発展が生み出す労働者の貧困にその原因があったといえよう。

- 9) 『抵抗基金団』は、1876年9月、「ブリュッセル綱領」を採択したのだが、それは、マルクス主義と無政府主義を混合したものであるといわれている (M. K. Dziewanowski, *op. cit.*, p. 12)。そして、「『抵抗基金団』の任務は、ストライキを組織し、あるいは自発的な寄附行為によってストライキ基金をつくることにある。」(エルスナー「ローザ・ルクセンブルク」邦訳、17ページ。)
- 10) 『プロレタリアート』については、フレーリッヒの前掲書によって、その全容をうかがい知ることができよう。すなわち、「1882年11月の綱領の呼びかけのなかで、かれらはつぎのように述べている——搾取されているものの利害と搾取しているものの利害が一致することは決してありえない。したがって、いかなる状況のもとでも、両者は同じ道を進むことはできない。民族的統一などという偽善の道を共にすすむことはできない。……だからこそ、ポーランドのプロレタリアートは、特権階級から自分自身をはきりとそして完全に分離し、こうして、経済的・政治的・道徳的志向の点で、はっきりと区別された自立的な階級として、闘争場裡に登場してゆくのだ——と。つまり、労働者階級にもっと近く親しい仲間、ポーランドの社会に見出されるのでなくて、ロシアの革命運動のなかに見出されるべきである、そしてポーランドの民族問題は、インターナショナルな社会主義運動のなかで解決されるであろう、というのである。」(P. Fröhlich, *a. a. O.*, S. 34.) 要するに、『プロレタリアート』の主張は、こうである、① 民族問題は迫りくる社会主義革命のなかで当然解決される問題であり、② 民族問題よりもむしろ経済問題が優先されねばならず、③ したがって、問題は、社会主義革命のための団結であり、ポーランドの独立は第二義的な位置をしめるにすぎない、ということであった (M. K. Dziewanowski *op. cit.*, pp. 13-14)。
- 11) G. D. H. Cole, *op. cit.*, p. 489.
- 12) M. K. Dziewanowski, *op. cit.*, p. 15.
- 13) 『プロレタリアート』の見解は、マルクス主義のインターナショナリズムに基いていたという

インテリ・グループは、『プロレタリアート』の世界主義的強調を非愛国的であると考へた」¹⁴⁾ し、こうした傾向は、すでに1881年、『ポーランド人民』 Polish People という組織のかたちをとって現われていた。これは、社会主義と愛国的民族感情との融合を説くリマノフスキー Boleslaw Limanowski に指導された民族主義の潮流であった¹⁵⁾。「こうして、すでに1882年段階で、将来の発展がたどる完全なパターンが、はっきりと見てとれるのである。』¹⁶⁾

1886年、『プロレタリアート』は歴大な逮捕のなかで放血瓦解した¹⁷⁾。しかし、1892年、果敢なワルシャワ・ストライキの波が血のサーベルによって押し戻されたのち、再度、民族主義綱領のもとに組織的集約の試みがなされた。

『ポーランド社会党』 Polish Socialist Party (PPS) の結成がそれである。PPS は、ポーランド社会主義運動のなかでかなりの成功をおさめた最初の組織であるといわれているが、それは、まだほんの組織化の緒についたばかりの

よりは、むしろコスモポリタニズムに基礎をおいていた」といわれる (P. Fröhlich, a. a. O., S. 38) が、この組織が、ポーランド社会主義運動における国際主義潮流の礎石であったことは疑いを容れない。

14) M. K. Dziewanowski, *op. cit.*, p. 14.

15) リマノフスキーは、『愛国主義と社会主義』の著者であり、『ポーランド人民』の指導者であった。かれらの主張は、こうである、——① 民族的抑圧は、いやしくも人間存在にとって面目きわまりないものであり、しかも全国民の経済的社会的発展を阻害する。② したがって、ポーランドの独立は、上層階級にとってもプロレタリアートにとっても、必要である。③ しかも、民族自決権の拒絶は、既存の不正の是認を意味する。④ プロレタリアートの国際的団結は結構だが、それは、自主独立したものとして存在し活動している諸国民のあいだで行われなければならない。⑤ 社会主義者は、具体的実際的でなければならない、そのスローガンは、労働者・農民にわかりやすく、かれらを共につかむものでなければならない。世界主義的団結などという怪しげな抽象物は駄目であって、愛国主義の情緒こそ、かれらにとって自明のことである、——と。(M. K. Dziewanowski, *ibid.*, p. 14.)

16) M. K. Dziewanowski, *ibid.*, p. 15.

17) 『プロレタリアート』の崩壊直後、ロシア領ポーランドにおける社会主義運動は衰退に向うが、1882年、若干の活動に従事する小集団が生れた。『第2 “プロレタリアート”』 Second Proletariat, 『ポーランド労働者同盟』 Union of Polish Workers, 『労働者連合』 Association of Workers などがそれである。とくに『ポーランド労働者同盟』は、カルスキー Julian Marchlewski (=Jan Karski), ワルスキー Adolf Warszawski (=Warski) などに指導され、のちの SDKP の組織的な核になってゆく。この組織は、経済闘争を基調にした組織であったが、漸次、反独裁の政治闘争に力点を移行させていったといわれている (M. K. Dziewanowski, *ibid.*, p. 18)。またローザについても、こういわれている、『ローザ・ルクセンブルクも、おそらく『ポーランド労働者同盟』をあたらしい組織として基礎づけることに協力していたのであろう。というのも、1889年にこの組織が成立して以来、かの女はどんなばあいにもこの同盟と親密であったのだから』 (P. Fröhlich, a. a. O., S. 24) と。

ときから、おおくの反対に遭遇しなければならなかった¹⁸⁾。そしてこのような状況のなかで、翌93年、『ポーランド王国社会民主党』Social Democratic Party of the Kingdom of Poland (SDKP) が成立するのである。SDKPは、とくに「ポーランド王国」と断わることによって、その活動を、ウィーン会議以来「ポーランド王国」として知られてきたロシア領ポーランドに限定し、「ポーランド」社会党 (PPS) の全ポーランド的性格を願う気持に対抗した¹⁹⁾。SDKP の立場は、インターナショナルなプロレタリアートの団結、なかんずくロシアの同志との密接な協力であり、ポーランド独立スローガンの拒絶であった²⁰⁾。

そして1893年以降のポーランド社会主義運動の歴史は、大きくいって、これらの敵対する2つのグループ、PPS と SDKP の闘いの歴史であった²¹⁾。しかも、この2つの党は、10年まえの『ポーランド人民』と『プロレタリアート』の伝統を、それぞれ、継承していたのであり、したがって、ポーランドの社会主義運動は、誕生のそのときから、民族主義とそれに対する国際主義の闘いの歴史によって貫かれていたのである。ローザ・ルクセンブルクの思想と行動の出発点になったのは、まさにこうした闘いの渦中にあるポーランド社会主義運動であった。事実かの女は、いわば母なる²²⁾『プロレタリアート』の伝統にはぐくまれ、あたらしく生れかわった SDKP の運動を理論的にうち固めるために、この闘いのただなかに身を投じていたのである。すなわち、ローザとかの女の

18) M. K. Dziewanowski, *op. cit.*, p. 21.

19) *Ibid.*, p. 23.

20) *Ibid.*, p. 24.

21) *Ibid.*, p. 21.

22) この点について、フレイリッヒは、つぎのように述べている。「はっきりと確信をもっていえるのは、ローザ・ルクセンブルクが、1887年ギムナジウムを卒業するとすぐに、『革命的社會主義者党・プロレタリアート』で活動していたということ、またかの女は、当時この党のワルシャワグループを指導していた労働者のカスブルツァークと密接な関係をとりながら活動していたということ、である。」(P. Fröhlich, a. a. O., S. 21.) 「かの女は、『プロレタリアート』の小さな集団のなかで、その理論的遺産を守っていたほんのわずかのすすんだ労働者と会合し、そこで地下文献を学んだ。そのなかには、もちろんマルクス・エンゲルスの著作も含まれていたのであって、これらのものが、かの女の生涯の見解の基礎となったのである。」(P. Fröhlich, a. a. O., SS. 23-24.)

同志マルヒレフスキー Julian Marchlewski (Jan Karski) は、93年チュールッヒで開かれた第2インターの第3回大会で、PPS ダシュニスキー Daszynski 派の策動に倒れ、一敗血にまみれた²³⁾。SDKP が組織されたのも、こうした経緯を直接の動機とするものであったし²⁴⁾、またそうであったればこそ、きたるべき第2インターの檜舞台・ロンドン大会は、PPS と SDKP が雌雄をあらそう決着の場とならなければならなかった。このようにして、ポーランド社会主義運動の正統性をめぐる論争が第2インター的規模で、したがって第2インターの理論機関紙と目されていた「ノイエ・ツァイト」*Die Neue Zeit* 紙上で、闘わされることになったのである。すでに示唆したように、ローザ・ルクセンブルクは、この論争のなかで SDKP を代表して論陣をはった。95年、かの女は、フランスの国立図書館でポーランド史の資料を研究し、その成果のうえに立って一連のポーランド論を発表したのが、それである²⁵⁾。

Ⅲ PPS およびマルクス・エンゲルスのポーランド論

前節でわたしは、ごく大雑把にはあるが、歴史的背景を叙述しながら、かの女の行動にとって「何が」問題であったかをさぐってきた。それは、要するに、PPS の民族主義論であり、その批判であった。そこでこの節では、第2の点、つまり、この民族主義論がかの女にとって「どのように」問題であったのかという点があきらかにされなければならない。わたしは、そこで闘わされた論争の性格をはっきりさせることによって、この課題をはたすであろう。

まず PPS の主張を検討することから始めよう。かれらは、96年の第2インター・ロンドン大会をまえにして、つぎのようなポーランド再建決議案を発表した。すなわち、「ある民族の他の民族による抑圧は、資本家と正制者の利益

23) P. Fröhlich, *a.a.O.*, SS. 52-55.

24) 「チュールッヒの大会で、ふるいポーランドの指導者が不寛容であったこと、とりわけカルスキーの代表権を認めなかったことのために、PPS は分裂することになった。……こうして、ローザ・ルクセンブルクとレオ・ヨギヘスの指導の下に、『ポーランド王国社会民主党』SDKP が生れたのである。(P. Fröhlich, *a.a.O.*, S. 55.)

25) P. Levi, *Karl Liebknecht und Rosa Luxemburg zum Gedächtnis*, 高村浪夫訳「ローザ・ルクセンブルク」弘文堂、昭和2年、96ページ。

にしかならないのであって、働く人民にとっては、それが被抑圧民族であろうと抑圧民族であろうと、同様に有害であるということ、とくにロシアの帝政は、ポーランドの抑圧と分割からその国内的な強さと対外的な重要性をひきだしており、国際的な労働運動の発展にとって永続的な危険をなしているということ、これらの点にかんがみて、大会はつぎのことを宣言する、ポーランドの独立は、国際的な労働運動にとっても同様ポーランドのプロレタリアートにとっても必然的な政治要求をなすものである、と。』²⁶⁾ また PPS の理論家とみられるクラカウのヘッカー S. Häcker も、この決議案の線に沿って、こう述べている、「ポーランド以外の国のプロレタリアートにとってはポーランドにたいする外交政策を意味するものが、ポーランドの労働者にとっては、国内政策でなければならない」²⁷⁾ と。このような引用文の文脈のうちに、われわれは、ポーランド独立の要求が当時のヨーロッパ社会主義運動のなかで自明の理であったという事実を、うかがい知ることができるであろう。というのも、ポーランドの独立は、社会主義の祖であるマルクス・エンゲルスが首尾一貫して主張したスローガンであったからである。したがって、かの女が直接相手にした論敵はポーランドの民族主義潮流 PPS であったが、その理論闘争のなかでほんとうに克服しなければならなかったのは、実はマルクス・エンゲルスのポーランド論そのものだったのである。では、マルクス・エンゲルスのポーランド論はどのような内容をもつものであったろうか——わたしはこの点をつぎに検討しよう。

さて、1884年、エンゲルスは『新ライン新聞』時代をふりかえて、こう述べている。「『新ライン新聞』の綱領は、つぎの2つの主要点からなっていた。単一不可分のドイツ共和国とポーランドの復興をも含むロシアとの戦争が、それである。……プロシヤの解消とオーストリア国家の瓦解、共和国としてのドイツの真の統一——われわれは、その他のなんらかの当面の革命的綱領は採用しえなかった。そして、これは、ロシアとの戦争を通じて、ただこの手段を通

26) S. Häcker, „Der Sozialismus in Polen“, *Die Neue Zeit*, Jg. 14, Bd. II, 1896, SS. 326-327.

27) S. Häcker, *a.a.O.*, S. 329.

じてのみ、実現することができた。……(したがって一引用者)、対外政策は単純だった。すなわち、あらゆる革命的人民に味方し、革命的ヨーロッパを、ヨーロッパ反動の偉大な背骨・ロシアに対する全般的戦争のためによびかけることである」²⁸⁾と。事実、当時のマルクス・エンゲルスはつぎのように語っている、「われわれがポーランドの抑圧に手を貸しているかぎり、そのかぎり、われわれは、依然ロシアとロシアの政策にしばりつけられたままであり、われわれ自身のあいだにある家父長的・封建的絶対主義を根本的に打破することはできないのである。民主的ポーランドの建設は、民主的ドイツの建設のための第1条件である。そして、ロシアとの戦争ということは、どういうことであつたろうか。ロシアとの戦争ということは、われわれの恥ずべき過去の全体と、完全にそして事実において、訣別するということであつた。ドイツを現実解放し統一するということであつた。」²⁹⁾「したがって、なによりもまず、ロシアの反動およびロシアの軍隊をたたきつぶすことが、われわれの問題である。」³⁰⁾いしかえれば、「ヨーロッパにとっては、つぎの二者択一があるだけである。モスクワによって宣言されるアジア的野蛮が雪崩のようにその頭上にくずれてくるか、それとも、ヨーロッパがポーランドを復興し、こうしてその社会的革新に必要な息づきの時間をうるために2千万の英雄をヨーロッパとアジアの間におかなければならないか、そのいずれか」³¹⁾ということになる。こうしたかれらの議論の根底にあるものが、「ロシア人憎悪こそドイツ民族における最初の革命的情熱であつたし、いまもそうである」³²⁾と語るかれらのロシア観であつたことは、いうまでもなからう。

以上でみてきたように、マルクス・エンゲルスの所謂ポーランド論は、ヨーロッパ革命の戦略的立場から出発している。すなわち、第1に、ロシアはヨー

28) エンゲルス、マルクスと1848—49年の『新ライン新聞』(1884年)、「マル・エン選集」第3巻、6—10ページ。

29) エンゲルス、フランクフルトにおけるポーランド問題の討論、(1848年)、「マル・エン選集」第3巻、144—148ページ。

30) エンゲルス、ポーランド人の宣言書、(1874年)、「マル・エン選集」第13巻、84ページ。

31) マルクス「ポーランドに関する演説」、(1867年)、「マル・エン選集」第11巻、148ページ。

32) エンゲルス、民主的汎スラヴ主義、(1849年)、「マル・エン選集」第3巻、501ページ。

ロップ反革命の要塞である、第2に、したがってヨーロッパ革命とりわけドイツ革命の成功のためには、ロシアにたいする戦争とその勝利が不可欠の前提である、第3に、こうした点からポーランドを位置づけるとき、それは、ヨーロッパ革命のための防壁・対露戦線の前衛でなければならない、というのであった。ここに、かれらの所謂ポーランド論は、そのまま、ドイツ革命・ヨーロッパ革命の戦略問題に、したがってヨーロッパ・プロレタリアートの対外政策上の問題に還元されてしまうのである。

これまでの行論のなかで、わたしは、マルクス・エンゲルスの「所謂ポーランド論」と断ってきたが、ここでこの「所謂」の意味するところをあきらかにしておかなければならない。第1に、それは、晩年のエンゲルスが、① 反動の害としてのロシア・ツァリズムの財政的崩壊ならびに政治的破産、② かつての没発展的なロシアにおける暴力的変革過程の進行、を理由に、防壁論（＝所謂ポーランド論）を放棄したという事実³³⁾を捨象している。また第2に、それは、かれらの議論の全体からすればとも「補論」としての位置しかもたないポーランド二段階革命論を捨象している。第2の点について、マルクスは、たとえばこう述べている、「ポーランドがふたたびその独立を闘いとったのちに、それが独立民族としてふたたび自分で自分のことが処理できるようになったのちに、ポーランドは、はじめて、自己の内的発展を再開し、ヨーロッパの社会的改造に自立的に寄与できるのである。生活力のある民族が、外国の征服者のために鎖につながれているかぎり、その民族は、どうしても、その全力を、その全努力を、その全エネルギーを、外敵に向けざるをえないのである。この全期間をつうじて、その内的生活は麻痺されたままであり、その民族は、社会解放のために闘争する可能性をもたない」³⁴⁾と。このポーランド二段階革命論は、エンゲルスによっても、たとえば、「プロレタリアートのインターナシヨ

33) エンゲルス、『汎斯拉ヴ主義』についてエンゲルスからベルンシュタインへ、(1882年)、『マル・エン選集』第7巻、403ページ；同、ロシア・ツァリズムの対外政策、(1890年)、『マル・エン選集』第17巻、101ページ。

34) マルクス、ポーランド人のために、(1875年)、『マル・エン選集』第13巻、91ページ。

ナルな運動は、独立民族のあいだでこそ、はじめて可能である」³⁵⁾ というかたちで継承されてゆくのである。しかし、それが「補論」にすぎないというのは、ポーランド問題の地平に関するかぎり、こうした議論は、内容のうえからいって、所謂ポーランド論にひきづられ、あるいは所謂ポーランド論から逆に演繹されているにすぎず、ポーランドその国にはあまりにも外面的であり、一般論的であるばかりではないからである。

このように、マルクス・エンゲルスのポーランド論は、所謂ポーランド論とその補論としてのポーランド二段階革命論から構成されている。しかし、われわれは、かれらのいずれの議論のうちにも、ポーランド人民による・ポーランド人民のための・ポーランド革命論を見出すことはできなかった。すなわち、ポーランドが、あるいはポーランド革命が、それ自体として問題にされるまでに、それは、ヨーロッパ革命あるいはドイツ革命との関係で論じられるか、この関係を前提にしてせいぜい一般論が論じられるか、であって、この点こそ、かれらのポーランド論にみられる性格であった。そして、ポーランドの運動主体がこのようなポーランド論をそのまま無条件で直輸入しているという事実、また第2インターの責任ある理論家としてのカウツキーですら、——晩年のエンゲルスに従って所謂ポーランド論つまり防壁論を放棄したのではあるが——大筋としては、マルクス・エンゲルスの議論を踏襲するにとどまっていたという事実³⁶⁾、これらの事実によってはじめて、われわれは、若きローザが挑まね

35) これは、1882年2月7日付のカウツキー宛のエンゲルスの手紙のなかから引用された。当時、ポーランドでは、『ポーランド人民』と『プロレタリアート』のあいだの論争が中断することなく闘わされていた。そして、チューリッヒの『ゾチアル・デモクラート』Sozial Demokratはこの論争にまきこまれ、カウツキーは、エンゲルスに、ポーランド問題に関する時論をたのんだ。この手紙が、かれの解答であった。この手紙は、『民族主義・国際主義・そしてポーランド問題』として、つぎの文献に収められている、P. W. Blackstock, B. F. Hoselitz (ed.), *Karl Marx and Friedrich Engels, The Russian Menace to Europe*, 1953.

36) カウツキーは、『ノイエ・ツァイト』の続きの論文で、ポーランド問題に対する立場をあらわかにした。K. Kautsky, „Finis Poloniae?“, *Die Neue Zeit*, Jg. 14, Bd. II, SS. 484-491, 513-525. そこで、かれは、ポーランド人民がポーランド独立の要求をかかげるのは当然であるとして、マルクス・エンゲルスのポーランド二段階革命論を支持し、ローザ・ルクセンブルクに反論するのである。すなわち、カウツキーは、かの女の論点をつぎの3点に整理し、その1つ1つに批判的検討を加えている。——そしてその3点というのは、① 独立要求の実現可能性の問題、② 物質過程の有機的・体化という認識、③ 分離主義的小ブルジョア民族主義という批判、

ばならなかった論争の性格をば理解することができるし、かの女にとってポーランド問題が「どのように」問題であったかをも、うかがい知ることができるのである³⁷⁾。

がそれである。まず第1の点については、社会主義党の綱領は力関係論ではないというのが、かれの批判であった。そしてこの批判は、そのまま、レーニンが再三再四言及するところとなった（レーニン、わが党の綱領草案、(1889年)、『全集』第4巻、227-228ページ；同、ロシア社会民主党の農業綱領、(1902年)、『全集』第6巻、104ページ；同、労働者党の農業綱領の改訂、(1906年)、『全集』第10巻、166ページ）。しかし、カウツキーは、ローザの実現可能性論の基本的性格を誤解または看過している。ローザの主張は、つぎの点にあったのであり、それは、卑近な力関係論ではなかった。かの女はこう主張したのであった。——プロレタリアートの闘いは、客観的な物質過程の展開に即して、これを押進め利用することによって進められてきた、また進められなければならないであろう。そしてこのような客観的な物質過程の展開に拘り所を求めないならば、闘うプロレタリアートの闘争課題を解決することはできないであろう、と。つぎに第2の点、ポーランド経済とロシア経済の有機的一体化傾向というかの女の認識については、第Ⅶ節で詳述するところであるが、かれの批判を先取りして見ておけば、こうである、「われわれがかの女に異論を唱えなければならないのは、かの女には永久に続くと考えられている傾向が過渡的な傾向にすぎないということである。」また「かの女が依拠している状態は、実際あるにはあるが、決してかの女が描いているほどはなほだしいものではない。それは消滅しつつある状態なのだ」と。そしてカウツキー自身の立場はといえば、ロシアとポーランドのあいだの経済戦争が激化の傾向をたどり、ロシア帝国政府は、鉄道料金・高率保護関税などの反ポーランド的経済政策を強化してゆくであろう、というのであった。したがって、第3の点、つまりポーランド独立の要求は分離主義的小ブル民族主義であるというローザの批判についても、かれは、——ポーランドの物質過程がポーランド一國資本主義の方向でその完成に向かって展開しつつある——という判断に立って、ポーランド独立のスローガンは、ポーランド・プロレタリアートにとって不可欠の要求であると論じ、マルクス・エンゲルスのポーランド二段階革命論の立場を継承したのである。

- 37) ここで、われわれは、直接には関係がないが、PPS と SDKP の論争にたいするレーニンの評価をみておこう。「PPS は1896年に他の時代のマルクスの見地を『固定』しようと企てたのは、マルクス主義の文字をマルクス主義の精神にそむいて利用しようとしたことを意味する。したがってポーランドの社会民主主義者（SDKP＝ローザ・ルクセンブルク引用者）が、ポーランドの小ブルジョア階級の民族主義の熱中に反対し、民族問題はポーランド労働者にとっては第2級の意義をもつものであると指摘し、はじめて純プロレタリア的な党をポーランドにつくりあげ、ポーランドとロシアの労働者は階級闘争においてもっとも密接な同盟をむすぶという原則がきわめて重要なことを宣言したのは、まったく正しかったのである。」（レーニン、民族自決権について、(1914年)、『全集』第20巻、464ページ——なおこの論文は、ローザ・ルクセンブルク、民族問題と自治、『社会主義評論』1908—09年、にたいするレーニンの反批判である。）「ただこれらの社会民主主義者が誤りをおかすことになるのは、ローザ・ルクセンブルクのように、ロシアの（傍点引用者）マルクス主義者の綱領において自決権を承認する必要を否定しようとするときである。このことは、本質的にいって、クラカウの見地からみて当然な関係を、大ロシア人をふくむロシアのすべての民族にあてはめることを意味する。」（前掲書、459-460ページ。）「ポーランドの民族主義にたいする闘争に心を奪われてしまって、ローザ・ルクセンブルクは、大ロシア人の民族主義をわすれてしまったのである。」（前掲書、440ページ。）——要するに、1896年を頂点とする PPS と SDKP との論争については、レーニンは、はっきりと SDKP＝ローザ・ルクセンブルクを支持していたといえよう。ただかれがかの女を批判するのは、1つには、民族問題が政治問題化する可能性を絶対に否定する「行過ぎ」に対してであり、2つには、ポーランドの見地をロシアの闘いにまで一般化すること、つまり被抑圧民族の民族問題に対する

立場から抑圧民族の民族問題に対する態度をも説明しきろうとする一般化にたいしてであった。そしてこの後の点については、フレーリッヒのつぎのような言及がある——また Tony Cliff, *Rosa Luxemburg*, London, 1959, 邦訳、浜田泰三訳、現代思潮社、もこの評価に依っている——すなわち、「ローザ・ルクセンブルクは、のちに民族自決権について、レーニンとはげしく対立することになった。そして、反ツァリズム闘争のためにポーランドの党をロシアの社会民主党に組織的に連繫させようとするかの女の期待は、この対立のために、ながいあいだ妨げられたのである。それぞれの状況が、2人の偉大な指導者にちがった立場をとらせたのであり、こうした立場のちがいからくる対立は根本的なものであった。ローザ・ルクセンブルクは、被抑圧民族の労働者階級のために活動していた。そのために、かの女は、プロレタリアートの階級闘争が民族主義的な志向によって変造されたり圧迫されたりするものではないということをはっきりさせなければならなかったし、またそうであるがゆえに、ポーランドとロシアの労働者階級の共同の闘いをもっとも重要視しなければならなかったのである。これに対して、レーニンは、大ロシア人を背景に、『百の民族』を抑圧している民族の1人として活動していた。そしてかれは、これらすべての民族の革命的な諸勢力を反絶対主義という点で統一融合することを、考えていた。だから、かれは、……大ロシア帝国に抑圧されている民族の民族的利害をば、はっきりと認めなければならなかった。したがって、かれは、力をこめてあくまでも民族自決権の公式を主張したのであった。」(P. Fröhlich, *a. a. O.*, SS. 48-49.)